

川口隆行『^{ヒロシマ}広島 抗いの詩学』、あるいは 「歴史と文学」をめぐるひとつの系をめぐって

成 田 龍 一

を問うものである」

(『広島 抗いの詩学』)

川口隆行『広島 抗いの詩学』(琥珀書房、二〇二二年)は、美しい書物である。機会に恵まれ、その内容を原爆研究会の例会で語った(二〇二二年六月二五日)。当日の報告内容は『UP』に掲載されたが(『川口隆行『広島 抗いの詩学』、あるいは21世紀の「政治と文学」について』『UP』二〇二二年八月)、「政治と文学」という視点から『広島 抗いの詩学』に接近した。

だが、いまひとつの問題系として、『広島 抗いの詩学』には「歴史と文学」という系もみられる。一九五〇年代の表現と一九五〇年代の運動―時代の関係の究明である。冒頭の一文はそのことを明示している。

「本書は、一九五〇年代広島における原爆文学と戦後文化運動という二つの領域の重なりに向き合うことで、そこに見出される表現と運動の歴史的経緯を明らかにし、今日的な意義

ことは、歴史と文学の領域的な重なりにとどまらない。「そもそもサークル詩とは、集団創作の実践である」という川口の認識からすれば、サークル運動のなかでの表現は、(集団(意志)と個(表現)とともに、集団の心性と作法、行動との合作である。「表現者としての主体形成」が、「作品」としての内的緊張が、一九五〇年代の位相のなかでの営みとして考察されることとなる。あるいは、小田切秀雄の「人類史の新しい段階は文学史の新しい段階にならずにはいられない」(一九五四年)という発言を、(三・一一を経たあとでは)「牧歌的な印象はぬぐい難い」とするとき、表現とその歴史的評価をめぐって、評価軸そのものの歴史性に目を向ける営みがなされる。

このことは、

「語るべき言葉を発しえない人々に言葉を与え、主体化を促す行為は、たとえ社会的、政治的にどれだけ正しい行為であったとしても、暴力性と無縁ではありえないかもしれない」

（『広島 抗いの詩学』）

との考察を、一九五〇年代の歴史的状況のなかで分析する営みとなる。『原爆に生きて』の手記から導き出されるこの考察は、他のサークル詩の表現分析をめぐる「リーダー格の男性たちによる指導、助言、介入の痕跡」の指摘として、表現が内包する力学の歴史的形態を導き出すということである。「固有名をもつた個人の創作でありつつ、そこには他者との交流の諸相が幾重にも畳み込まれている」との指摘は、川口による作品分析の美しさとともに、「歴史と文学」の問題系をあらたな視点で誘うものとなっている。実のところ、二〇〇〇年代のサークル運動の研究そのものも、そうした志向と傾向をもつが、例会当日、著者を交えての討論のなかでも、歴史と文学の関連への関心が背後にみられた。そのとき、討論のなかで「ゴミ」という語を用いて「へたくそ詩」が話題となったことは、作品をめぐる集団性、評価軸の歴史的位相の文脈において、「歴史と文学」をめぐる議論のいまひとつの系を出現させたと思う。本稿では、そのことを記してみたい。

*

*

サークル誌における「へたくそ詩」については、同時代から問題となり、近年の研究でも議論されてきている。サークル研究を領導したひとりである道場親信は、（サークル同人たちは）「文学」の意味の転調」として把握し、批評家たちが言う「へたくそ」とは「別の価値のあるもの」＝「X」としようとしていた、と論じていた（シンポジウム「サークル誌をどう読むか」における発言。道場・川口・宇野田ほか編『サークルの時代』を讀む』影書房、二〇一六年）。これをうけて、宇野田尚哉も、「サークル詩というガラクタの山」を、「当時の」人びと、および「われわれ自身」の問題との「二重の問題」として考える必要がある、と応じた。さらに、坪井秀人も議論に参入している——そのことが、再度、例会当日も話題となったのである。

文学の領域における「ゴミ」——「へたくそ」という評価を与えられる作品、それに先行して認識されている「へたくそ」という評価軸をめぐる議論は、歴史学を学ぶ私にとって、一九七〇年代後半のある未発の論争と結びついている。色川大吉と西川長夫というふたりの歴史家と文学者による、歴史学と文学をめぐる議論である。色川—西川のあいだでも（ここでは意味内容は大きく異なっているが）「ゴミ」という語を用いて議論がなされ、ここでは歴史学と文学との認識の相違が焦点とされた。歴史学と文学との差異が、「ゴミ」という認識を軸に衝突し、双方の差異があきらかになる瞬間であった。サークル誌の時代（一九五〇年代）ほどではないにせよ、いまだ文学批評や歴史学界において、マルクス主義の影響が強かった時期での議論である。

色川大吉は「民衆史研究」を唱え、一九七〇年代には歴史学の領域を超えて、大車輪の活躍をしていた歴史家である。色川はい

「歴史に埋もれた人民の思想の地下水をさぐろう。そこに未来を拓く変革の契機——『未発の契機』をさぐろう。その歴史の底の水脈に自分の視座を据えないかぎり、真の思想の自立もありえない。その底辺から全歴史をとらえ返す方法をあみださなくてはならぬ」

（『明治精神史』一九六四年）

この色川に対し、フランス文学・思想を考ずる西川長夫が、『歴史学研究』に二本の批判論文を掲げ、真正面から批判を行った（R「歴史研究の方法と文学」、S「歴史叙述と文学叙述」（『歴史学研究』第四五七号、第四六三号、一九七八年六月、一二月））。

批判の焦点としたのは、マルクスの読みである。色川が引用する、マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』（一八五二年）の箇所を引いて、西川は自らの読みを批判的に対置する。まずは、色川が引用した箇所である。

「ルンペン・プロレタリアートのかしらになるボナパルト、自分の個人でもとめる利益を、この場合大衆的な形式でしかみいだせぬボナパルト、あらゆる階級のこうしたくず、ごみ、かすこそ自分が無条件にたよれるただ一つの階級だとさとしてるボナパルト、これこそがほんとうのボナパルトであり、

お世辞めぎのボナパルトである」

（『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』）

西川は、『明治精神史』のなかに『ブリュメール18日』のこの部分が、ほとんど何の疑いもなく「歴史叙述の模範」として引用されていることを「大きな驚き」であった、と問題を投げかける。『ブリュメール18日』を魅力的ですぐれた歴史叙述の一つであると認めながらも、他方では「（とりわけここで引用された部分に）マルクスの弱点が最も鋭く露呈している」と西川は言う——色川の引用箇所は、「マルクスの同時代の文学にたいする反撥と無関心、さらには当時の底辺の民衆にたいするある種の蔑視があらわれている」とした。

そして西川はこの論点を敷衍し

「文学の主題にかんして言えば、マルクスが列挙しているあらゆる階級のくず、やごみやかすをとりあげそこに自己を仮託して形象化したのがその時代の文学ではなかつたか」「バルザックがこれらの社会のくず、やごみにこそぞ視線はマルクスのそれと何というちがいであろう」

（R「歴史研究の方法と文学」）

と述べる。「歴史の価値体系のなかでこれらのくず、やごみはまさしくくず、やごみでしかないのである」と喝破する。これにたいし、文学においては「くず、やごみが作中の主要人物となりうる」——「文学の価値体系のなかではくず、やごみにも重要な位置

をしめる可能性がある」という。そして、「社会的なくずやごみ」に価値を認める価値観として、「個の絶対性の主張」をいう。

いささか性急な展開であるが、一九七〇年代後半の議論としては、歴史学と文学との差異にかなり肉薄していたであろう。西川による色川批判は、「歴史研究の方法と文学」——「歴史と文学の本質的なちがひ」におよび、「より根本的には描くべき人物の選び方、つまりはその選択の基準にあるのではないか」とされるのである。

「底辺」といい「地下水」といっても、歴史においては、それはしよせん頂点的思想を位置づけるのと同じ価値体系のなかではたすべき役割（史観）によって位置づけられており、その限りにおいては文学から見れば、「底辺」はやがては「頂点」になるべきもの、つまりは「頂点」の裏返しにすぎないものと映る」

「未来を拓く変革の契機」という発想自体が、一定の未来とのかかわりにおいて過去と現在を判断することであり、その未来とのかかわりにおいて（したがって特定の史観と歴史的価値体系によって）民衆のポジティブな側面に照明があてられるのである」

（R 「歴史研究の方法と文学」）

と述べられる。Sによる色川批判はさらに厳しく、「歴史叙述と文学叙述」にまで踏み込む。色川の歴史叙述は、「ほとんど限

界に近いまでに文学に接近」しつつ、しかも「歴史叙述としての節度」を保っている。しかし文学とは明らかに一線を画しており、この歴史叙述にもさまさまな矛盾があったとした。そして「雄大な俯瞰図」と「底辺の視点」とはかならずしも一致せず、（色川において）「底辺民衆の歴史的時間のリズムは暗示されていない」という。ことばを換えれば、色川は「反体制的」な文体をもつが、「民衆」に対して「権威として立つてはいないだろうか」と問う。色川に示される歴史の「語り」の位置は、国民国家に同一化しているという西川の批判である。

西川は「言葉はひとつの権力であるという観点」から、①「叙述」は「全国民の言語活動およびそれを支配している権力と密接な関係」を有しており、そのゆえに②「叙述」は「報告のための単なる手段ではなく歴史研究者の歴史認識にかえてゆかねばならない」とする。したがって、③「叙述」は、「えらんだ文体と形式によってイデオロギー的である」と議論を展開する。「叙述は歴史研究にとつて重要な実践の場」との認識から、西川の議論は「視点」「対象」から「叙述」「文体」へとおよび、大きな広がりの中で色川—歴史叙述を問題化するものであった。

しかし、かかる批判に対し、色川はのつけから反発し、自らの問題意識を語ることで終始し、「対話」を拒絶した（『歴史叙述の理論』をめぐって『歴史学研究』第四七二号、一九七九年九月）。

ちなみに、十数年後、色川は遅ればせの全面降伏をする（『同時代ライブラリー版へのあとがき』一九九二年）——「今度、自分の反論とあわせ再読して、全くマトのはずれた異論を唱えたことに研究者として恥じ入るばかりである」。

不発の論争となり終えた西川―色川の議論だが、かかる未発の論争が、「ゴミ」という語を入口としてなされようとしていたのである。「叙述」―「語り」の作法が、「ゴミ」ということば―認識に凝縮され、歴史学と文学という地平で問題化され、一九五〇年代の「へたくそ詩」、さらにそのことを再度問題化する二〇〇〇年前後の議論と響き合ってくる。

*

*

例会当日の討論のなかで使用された「ゴミ」という語をめぐって、このようなことを考えていたが、折も折、高橋源一郎『ぼくらの戦争なんだぜ』（朝日新書、二〇二二年）の戦争体験の文章に接した。高橋の「母」が記した、二二〇枚にもおよぶ「自伝」をめぐっての記述である。

「母の自伝の大半は、いわゆる「自分史」だ。そして、それは、ひどく退屈だ。しかし、それは、彼女の人生が「退屈」であったという意味ではない。母は、「退屈」にならない語り方を知らないだけなのだ」

（『ぼくらの戦争なんだぜ』）

「語り方」に言及する一方、高橋は「あの戦争」について「語る側」ではなく、「聞く」側の方にも、大きな問題があったのではないだろうか」と、「聞く」ことも併せて組上に載せる。

「ゴミ」から「退屈」へ。一九五〇年代のサークル誌のなかで

「へたくそ」とされた論点は、かように奥行きを有し、しかも問欠泉のように十数年ごとに問題化されている。さらに西川―色川が文学―歴史学への方向性を有していたのに対し、二〇〇〇年代に入ってから議論は、一九五〇年代の認識枠組みと、二〇〇〇年代の認識枠組みとの対比として、時代相にむかうものとなっている。受容があらためて焦点化されるといってもよい。

こうしたとき、歴史家の藤原辰史の新著が『歴史の屑拾い』（講談社、二〇二二年）として刊行されたことには着目したい。藤原は、ベンヤミンを参照しながら、「屑拾いの『ぎくしゃくした歩き方』――下を向いて立ち止まりながら歩き、「捨てられたもの」をじっと観察することに目を向け、その身振りによる歴史の再考を遂行していく。「地べたに捨てられたものの知からぎくしゃくした身振りで歴史を組み立てなおすこと」をいい、その実践へとむかう。「屑拾いの『ぎくしゃくした歩き方』」から、こうした歴史をめぐる議論を紡ぎ出す藤原は、これまでの歴史学の作法―方法―問題意識、そして倫理からはこぼれ落ちる事象に目をむけ、捨て去られた事象を拾い集め、それらを再生し組合せ叙述し、あらたなアジェンダとして蘇らせる。『歴史の屑拾い』には「歴史と文学」という章も含んでおり、「ゴミ」からはじまるあらたな展開も始まっている。